

今、必死になってこの原稿を書いているのだが、日付は四月一日である。つまり、以下に書くことは全部嘘であるからそのつもりで。え？ 四月一日でなくてもどうせ嘘かでたらめしか書かないだろうって？

そうです。

さて。

寒い冬も過ぎ、そろそろ初夏の声をきく頃になりましたが、みなさまいかがお過ごしでしょうか。春夏秋冬、四季の別があるのは日本だけかと思っていたら、各国それぞれ季節の移り変わりがあるんですね。初夏という概念はインドにもあり、古代インドのある王様は、ある朝、目覚めたときに、風の匂いで初夏の到来を感じ、「あ、初夏」と思わず叫んだそうでございます。これがのちの「あ、初夏」王だということでございます。

こういう季節には、日本人なら誰しも頭に浮かぶ一句がございますね。えーと、どんなでしたかな。ど忘れしてしまいました。なんか、アニメーションのことを詠んだ句でしたっけ。

「アニメをば……」ちがうな。「アニメ……」あ、アニメをば、じゃなくて、メニアをばでした。失礼しました。目に青葉、山ホトトギス、初ガツオ。初ガツオか何かで一杯きゅーといきたいですね。カツオの叩きの一番おいしい食べ方をご存じですか。カツオの叩きを油で揚げるんですね。

叩き揚げちゅうてね。おもしろない？

え？ まだ四月だって？ 初夏にはだいぶ早い？

そ、そう言われれば……でも、雑誌とかはどれも五月号が出ますから……。

ところで皆さん、邪馬台国の住人は、みんな煙草を吸わなかったというのをご存じですか。

昔からよう言いまんがな。「ヤマタイ人に禁煙パイポ」……ごまかすなっ。

そういえば、「こないだ「ミステリマガジン」の「ディクスン・カー特集」というのにエッセイを書きましたが、秋の夜長にミステリを読むというのはなかなかよろしいですな。え？ だから、まだ四月だって？ だーかーらー、これはインターネットなんだから、初夏に読む人だっているし、秋に読む人だっているわけです。

ミステリといえば、カー、クリスティと並ぶ巨匠にエラリー・クイーンがいます。これは、マンフレッド・リーとフレッド・ダネイという二人の従兄弟の合作ペンネームで、マンフレッド・リーのほうは早くに亡くなったんですが、フレッド・ダネイのほうはアンソロジストや雑誌編集者としても大活躍しました。ダネイが編んだ有名なアンソロジーに「黄金の13」というのがあるんですが、これはつまりミステリ史上最もすばらしいとダネイが考えた13本の短編を集めたもので、まさに珠玉のアンソロジーですな。ダネイは82年に亡くなりましたが、その死の直前に、「黄金の13」を超えるアンソロジーを企画していたことはファンの間では有名です。タイトルも決まっていた「ダイヤモンドの13」という題名になる予定だったそうです。ダネイはその頃、カンジダ皮膚炎に罹ったり、ときおり胃痙攣を起こすなど、かなり体調が悪かったようですが、ある雑誌にこの「ダイヤモンドの13」

に関するダネイのインタビューが載っていたので一部を転載しましょう。

「フレッド・ダネイさん、今度出るというアンソロジー『ダイヤモンドの13』ですが、どんな作品が収録されていますか」

「ダイヤモンド・ダネイ……」

「え？」

「ああ、予感の本物。ああ、うまく言えないけれど、宝物だよ」

「あの……つまり、すばらしいアンソロジーになるという予感がしたけれど、その予感の本物だった。ダイヤモンドのような珠玉の作品が集まり、細かい説明はしにくいけれど、まさに宝物だ、ということでしょうか」

「ダイヤモンド・ダネイ……」

「いろいろ編集時のご苦勞もあつたと思いますが、たしか作業中に皮膚炎になっていたとか」

「そのときカンジダ……」

「カンジダ皮膚炎だったんですね」

「うまくいえない胃痙攣どー」

「胃痙攣も起こしていたんですね」

「ダイヤモンド・ダネイ……」

「もうええちゅうねん」

ミステリの帝王と言われたエラリー・クイーンの片割れの、意外な日本ポップス好きがわかって興味深いインタビューだった。というようならためを書いていけると、クイーンファンから文句が出るかもしれないが、そんなことは当方は感知しない。「とっちらもぎ取り」なのである。

「さあ、評判、評判。時代小説の第一人者池波正太郎先生の代表作『剣客商売』ですばい」

「お、こんなところに見せ物小屋がある。おい、おにいさん、一人なんぼや」

「お一人さまが八文ですばい」

「ほな、ここに八文置いとくで。おにいさん、九州の出身か？」

「鹿児島は桜島ですばい。さあ、ずっと正面、ずっと正面」

「正面……言つても何もあらへんがな。トレーニングウェア着た変なジジイがルームランナーで走ってるだけやん。おい、これが『剣客商売』か」

「その爺さんはおいどんの曾祖父さんじゃが、いまだに一日42・195キロのさらに倍、84・390キロのマラソンをかかしたことがないという健脚の持ち主ばい。その素晴らしい健脚をお客さんにもご覧いただこうというのが、『健脚ショー』ばい」

「『健脚ショー』ばい？ 『剣客商売』とちがうんかいな。おい、銭はどないなんねん」

「とつたらもぎ取り。かわろ、かわろ」

「八文とられてしもた。しゃあけど『剣客商売』と『客商売』ほどちがうゆづのはどうかな。お、また見せ物小屋がある」

「さあ、評判、評判。時代小説の第一人者池波正太郎先生の代表作『鬼平犯科帳』や」

「今度は鹿児島弁やないな。おい、おにいさん、一人なんぼや」

「お一人さまが八文や」

「ほな、ここに八文置いとくで」

「ずっと正面、ずっと正面」

「正面……言つても、また何もあらへんがな。変なババアが織物をしただけやないか。おい、これが『鬼平犯科帳』か」
「その婆さんは、わしの曾祖母さんやが、織物の織り手なんや。今織ってるのはハンカチ用の織物でな、『織り手・ハンカチ用』じゃ」

「『織り手・ハンカチ用』？ 『鬼平犯科帳』とちがつんかいな。おい、銭はどないなんねん」

「とつたらもぎ取り。かわろ、かわろ」

「また八文とられてしもた。しかし、『剣客商売』『鬼平犯科帳』ときたら次はあれやと思っけどな……。お、また見せ物小屋がある」

「さあ、評判、評判。時代小説の第一人者池波正太郎先生の代表作『仕掛人・梅安』や」

「やっぱりか。おい、おにいさん、一人なんぼや」

「お一人さまが八文や」

「ほな、ここに八文置いとくで」

「ずっと正面、ずっと正面」

「正面……言つても、また何もあらへんがな。ゴルフコースみたいなとこにキャディさんがおるだけや。まあ、わしはゴルフ好きやから、ちょっとやってみよか。おっ、右にスライスしてしもた。次は左に引っかけなあかな。キャディさん、左に引っかけるにはどないしたらええかいな」

「二番アイアンで打ちはったらどうです？」

「ほな、二番アイアンで……わかった。もしかしたら『仕掛人・梅安』とちごて『引っかけ・二番アイアン』か」

「そのとおりそのとおり」

「銭はどないなんねん」

「とつたらもぎ取り。かわろ、かわろ」

「あー、えらい目におつた。合計二十四文とられてしもたがな。もつとまともな見せ物はないんかいな」

「この男、あつちでとられ、こつちでとられ、大きな小屋の前にやってまいりました。」

「お、これは前のやつとちごて、えらい大きな小屋やな。こつというのはまともとちがつか」

「さあ、評判の人面瘡や。親の因果が子に報い……」

「これはおもしろそうや。人面瘡ゆつたら、人間の顔みたいなもんが手とか足にできて、それがしゃべったり、ものを食べたりするやつやな。おい、銭はなんぼや」

「お一人さまが二十文じゃ」

「やっぱりまともな見せ物は木戸銭も高いな。おい、ここに置くで」

「さあ、ずっと正面、ずっと正面」

「なんか広い舞台があるな。さすが二十文とるだけのことはあるわ。さっきとはえらちがいや。お、なんか変なタイコモチみたいなやつが犬連れて出てきよったな」

「これはこれは、社長、ようこそおいでくださいました。おこんつわ」

「おまえはなんや」

「拙は司会進行役の繁八ともうします。以後、お見知り置きを」

「そんなもんどうでもええ。人面瘡はどこや」

「ここにあります、この犬の顔。どことなく人間の顔に似てませんか」

「似てへん。ただの犬や」

「今はそうでございしますが、前はもつと人間そっくりでした。あんまりにも人間に似てるんで、薬で治したんです」

「人面瘡が薬で治るんかい。なんちゅう薬や」

「面瘡レータム」

「あほか」

「次に出てまいりましたのが人面魚、その次が人面猫、人面牛、人面馬、人面猪、人面鼠、人面虎、人面蛇、人面兎、人面羊、人面狼、人面蛙、人面鯛、人面鰻、人面豹、人面蚊、人面蠅、人面鯉、人面鮒、人面鯰、人面象、人面鳩、人面鶴、人面熊、人面狐、人面狸、人面鮭、人面鷺、人面鷹、人面隼、

人面蝶、人面蛾、人面貉、人面猿、人面鶏、人面鮫、人面蚤、
 人面豚、人面鵝、人面亀、人面鯨、人面鵲、人面鶯、人面燕、
 人面雀、人面鱈、人面鯖、人面鮎、人面鰯、人面鴨、人面鰐、
 人面鮪、人面鹿、人面蟹、人面鯉、人面虱、人面貂、人面蛤、
 人面蜆、人面蛇、人面蚕、人面蛆、人面蛭、人面蟻、人面鱗、
 人面鮐、人面鮑、人面鰈、人面蛸、人面鮓、人面鱈、人面鱗、
 人面鵲……でございます」

「なななななんやねんこれは。舞台が一杯になってしもたがな」
 「勢揃い、人面生物、総勢75匹でございます」

「いやー、何考えてんねやろなー。しゃあけどまてよ。人面
 犬、人面魚、人面猫、人面牛、人面馬、人面猪、人面鼠、人
 面虎、人面蛇、人面兎、人面羊、人面狼、人面蛙、人面鯛、
 人面鰻、人面豹、人面蚊、人面蠅、人面鯉、人面鮒、人面鯰、
 人面象、人面鳩、人面鶴、人面熊、人面狐、人面狸、人面鮭、
 人面鷲、人面鷹、人面隼、人面蝶、人面蛾、人面貉、人面猿、
 人面鶏、人面鮫、人面蚤、人面豚、人面鵝、人面亀、人面鯨、
 人面鵲、人面鶯、人面燕、人面雀、人面鱈、人面鯖、人面鮎、
 人面鰯、人面鴨、人面鰐、人面鮪、人面鹿、人面蟹、人面鯉、
 人面虱、人面貂、人面蛤、人面蜆、人面蛇、人面蚕、人面蛆、
 人面蛭、人面蟻、人面鱗、人面鮐、人面鮑、人面鰈、人面蛸、
 人面鮓、人面鱈、人面鱗……まだ七十四匹しかおら
 んで」

「面瘡もございません。拙めが、人面人で七十五番目でございます」

「はあー……それで、いったいこれはなんやねん」

「わかりませんか。人面75」

「え？」

「人面75」

「え？」

「なんべんも言わしなはんな。人面75」

「……銭はどないなんねん」

「とつたらもぎ取り。かわろ、かわろ」

「ああ、またしょうもないことで銭とられてしもた。おい、田中啓文」

（ギクッ）な、なんです？

「こんなあほみたいなエッセイで原稿料もろてええと思とんか！」
とつたらもぎ取り。かわろ、かわろ……。

（了）